

13. 中心人物論

序論

神様の摂理歴史を通して、この人類の歴史は一言でいうなら、アダム、エバの墮落以降ずっと、人類の回復を願う過程であったと言えよう。したがって、聖書上の多くの重要人物たちは、すなわち神様のみ旨のために召された使命者たちであった。

例) ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、士師たち、サウル、ダビデ、ソロモン、預言者たち、マラキ、イエス様、再臨主

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠されたことを示さないでは、何事をもなされない」(アモス 3 : 7)

神様は、神様と人間の間には仲保者を立てられ、彼を通して神様のみ旨を伝えられ、摂理を広げられるということだ。ここに中心人物の必要性があるのだ。

本論

1. 中心人物の資格 (WHO?)

(1) 神様の摂理を担う選民から生まれないといけない。選民は心情的に神様と大変近いからだ。

(2) 気品 (気性) と思想を見られる。

「エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結び、その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である」(イザヤ 11:1-2)

(エホバの神様を敬う臣下であること、神様のような思想・心情を備えていること)

「このしのめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべきこと、旗を立てた軍勢のようなものはだれか」(雅歌 6:10)

(しのめのようにはっきりしていて、月のように穏やかで、太陽のように輝き、旗を立てた軍勢のように厳かな? 女性)

(3) 神様のみ旨のために必要とされる時代と地域を顧みられる

2. 中心人物の選出過程/方法 (HOW?)

「神はあらかじめ知っておられる者たちを、さらに御子のかたちに似たものにしようとして、あらかじめ定めて下さった。それは、御子を多くの兄弟の中で長子とならせるためであった。そして、あらかじめ定めた者たちをさらに召し、召した者たちをさらに義とし、義とした者たちには、さらに栄光を与えて下さったのである」(ローマ人への手紙 8 : 29-30)

(1) 定める (CHOOSE, APPOINTING)

(創世以前から予定、予知予定)

「みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあって私たちを選び」(エペソ人への手紙 1:4)

「私たちはみ旨の欲するままにすべてのことをなさる方の目的の下に、キリストにあってあらかじめ定められ、神の民として選ばれたのである」(エペソ人への手紙 1:11)

(2) 召す (CALL)

テサロニケ人への第 2 の手紙 2:13-14

「それは、神があなたがたを初めから選んで、御霊によるきよめと、真理に対する信仰とによって、救いを得させようとし、そのために、私たちの福音によりあなたがたを召して、私たちの主イエス・キリストの栄光に与らせてくださるからである」

「福音により召す」とあるが、召されたときに来なければいけない。つまり福音を伝えたときに聞かないと、チャンスはその限りだということだ。サマリアの女、マグダラのマリヤのように、また乞食ラザロの話からも分かるように、召されるのも「時」があるということであり、これはまたカインとアベル、善・悪を分立する意味も持つ。

(3) 義とされる (JUSTIFICATION)

ローマ人への手紙 9:14-16

「神はモーセに言われた、『私は自分のあわれもうとする者をあわれみ、いつくしもうとする者を、いつくしむ』。ゆえにそれは人間の意志や努力によるものではなく、ただ神のあわれみによるのである」

自分自身を助ける者を天は助けられる。

このような意味であわれむものをあわれまれるとおっしゃった。すなわち、この「創意」の過程は人間の責任分担の過程だとも言えよう。

例

◎ノア

その時代の義人、完全な者、神様と同行した者

・アブラハム

信仰を見られて義とされた (イサクを捧げたこと)

カルデアのウル→ハラシ→カナンの地に導かれた

◎ヨブ

忍耐の人

◎ヤコブ

カナシ→ハラシ、パダンアラム→カナンの地に導かれた

◎ダビデ

ユダヤ民族のエッサイ家の末子

サムエル記上 16:1-4

「さて主はサムエルに言われた、『私がすでにサウルを捨てて、イスラエルの王位から退けたのに、あなたはいつまで彼のために悲しむのか。角に油を満たし、それをもって行きなさい。あなたをベツレヘムびとエッサイのもとに遣わします。私はその子たちのうちに一人の王を探し得たからである』。サムエルは言った、『どうして私は行くことができますよう。サウルがそれを聞けば、私を殺すでしょう』。主は言われた、『一頭の子牛を引いて行って、「主に犠牲を捧げるために来ました」と言いなさい。そしてエッサイを犠牲の場所に呼びなさい。その時わたしはあなたのすることを示します。私があなたに告げる人に油を注がなければならない』。サムエルは主が命じられたようにして、ベツレヘムへ行った。町の長老たちは、恐れながら出て、彼を迎え、『穏やかなことのために来られたのですか』と言った」

(エッサイの息子ダビデにあったところ、わが心に叶う者なので、わがみ旨をなすようにしよう)

使徒行伝 13:22

「それから神はサウロを退け、ダビデを立てて王とされたが、彼についてあかしをして、『私はエッサイの子ダビデを見つけた。彼は私の心に叶った人で、私の思うところを、ことごとく実行してくれるであろう』と言われた」

◎イエス様

ミカ書 5:2

「しかしベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちから私のために出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである。」

ダニエル書 7:13

「私はまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた」

イザヤ書 11:1-9

「エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結び、その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。彼は主を恐れることを楽しみとし、その目の見るところによって、さばきをなさず、その耳の聞くところによって、定めをなさず、正義をもって貧しい者をさばき、公平をもって国のうちの柔和な者のために定めをなし、その口の鞭をもって国を撃ち、そのくちびるの息をもって悪しき者を殺す。正義はその腰の帯となり、忠信はその身の帯となる。」

(4) 栄光を与える(GLORIFICATION)

テモテへの第2の手紙 2:20-21

「大きな家には、金や銀の器ばかりではなく、木や土の器もあり、そして、あるものは尊いことに用いられ、あるものは卑しいことに用いられる。もし人が卑しいものを取り去って自分を清めるなら、彼は尊い清められた器となって、主人の役に立つものとなり、すべての良いわざに間に合うようになる」

地球 = 器 ⇒ 人間（尊く用いられるためには清められないといけない）

使徒行伝 3:13

「アブラハム、イサク、ヤコブの神、私たちの先祖の神は、その僕イエスに栄光を賜ったのであるが、あなたがたは、このイエスを引き渡し、ピラトが許すことに決めていたのに、それを彼の面前で拒んだ」

ローマ人への手紙 12:1

「あなたがたの体を、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」

この御言葉のように、私たち自身の考えと行いの器を、生きた聖なる供え物として神様に捧げる時に、神様も私たちを通して心ゆくまで歴史を広げられるし、栄光を与えられるのだ。

結論

歴史的に見ても分かるように、ただ時代の中心人物だけが、その時代の神様の御言葉を知ることができ、その御言葉を人々に告げ知らせるのみ、果たすべき使命が与えられる。

※参考

ヨハネの黙示録 1:11

「その声はこう言った、『あなたが見ていることを書きものにして、それをエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤにある 7 つの教会に送りなさい』

ヨハネの黙示録 1:19

「そこで、あなたの見たこと、現在のこと、今後起ころうとすることを、書き留めなさい」

このように選ばれた、時代の中心人物たちは、どの程度の人物であれ、時代に割り当てられた自分の使命を全うしてこそ責任を果たすことができるので、私たちは、こういった中心人物の路程と使命をよく悟って、その方を通して天の御言葉を伝え受けなければならぬ。このような講義を聞く目的も、この時代の秘密を解く、時代の中心者を分かって、その方について行こうということにある。